

全国盲学校弁論大会 原稿

「空へ」

奈良県立盲学校 高等部普通科3年 川添 愛

もし私が弱視でなければ、今ここにはいません。
そう考えると胸は痛むのに、自分の病気と向き合えない私がここにいます。
何で私なんやろ、何度も何度もそう思いました。
遠くの物が見える、それってどんな感覚なん？
生まれつき弱視の私は見える、と言うことの意味がよく分かりませんでした。
小さい頃の私は、好奇心旺盛だったため母は人一倍私のことを思って育ててくれました。
小学校に入学した私は高学年になるにつれて、周りの目やクラスメイトの声が気になり始めました。
そう感じ始めると体育の時間が辛く、野球やサッカーなどは到底出来るはずがありませんでした。
「こいつがおるから、負けるねん。」
そう言われる度、そんなん分かってるわ、そういった気持で心がいっぱいになりました。
小学六年生の昼休み、私があることで泣いてしまった時、仲のよい子にこう言われました。
「愛はさあ、右目からも涙出るん。」
その心ない一言が私にとって辛く、心に穴が空いたような、そんな気持ちになったのです。その時私の病気のことをもっとたくさんの人に知ってもらわなければならないと思いました。
中学校からの生活を変えてみたい、誰に何を言われてもいい。私は新たな環境になったことを機にそう決意しました。
しかし、中学校入学式当日、いろんな壁にぶちあたってしまった私は何度も目をそらしてしまいました。
担任の先生がみんなの前に立ち、
「これはこうです、こんな風に書いてください。」と私に教えてくれました。
けど、そんなん言われたって、私には見えへんし分からん。中学校に来てまでもう嫌や。そんな気持ちでいっぱいになりました。
そして、新たな環境の中で必ず訪れる、私というクラスメイトの紹介。
「一番前に座っている川添さんは…。」

また、私の病気のことを言われるんや、そう思いました。

先生の話の内容が予想できた私は、この場にいたくない、という気持ちから涙を流してしまいました。

結局、私は1年の間、友達に心を開くことはありませんでした。

精神力を高めたい、今よりもっと強くなりたいといった気持ちから2年になると同時に私は柔道部に所属し、日々の練習に励むようになりました。そして中学卒業をきっかけに、自分の意思で、盲学校という道を選びました。

盲学校に通うということは、自分の病気と向き合えた、ということでもあり、また、新たな事に挑戦するといった意味もありました。

入学当初の私はやはり、その場に馴染むことができませんでした。そのせいで、周りの人や家族にまでたくさんの迷惑をかけてしまい、いろんな面で悲しませてしまうことも多々ありました。

その度に後ろを振り返っては自分自身というものについて考え、自分の行動や意思、病気に対する消極的な考えをもっと前向きなものにしたい、そう思うようになりました。

障害、人には分かってもらえないことがたくさんあります。辛いことや悲しいことがたくさんあります。

けれど私はそれを自分自身の力に変えたいのです。

障害なんて何も恥じることではない。私は今出来ることを精一杯やってみたい。

将来に繋がる何かを一つ一つ見つけたい。

家族や仲間、そして今ここにいる、大切な人たちと一緒に――